



Title	A. プラトーフ 『土台穴』 におけるくびき語法
Author(s)	野中, 進
Citation	スラヴ研究, 51, 273-293
Issue Date	2004
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/39054">http://hdl.handle.net/2115/39054</a>
Type	bulletin (article)
File Information	51-009.pdf



[Instructions for use](#)

# A. プラトーフ 『土台穴』 におけるくびき語法

野 中 進

『土台穴』はアンドレイ・プラトーフ (1899-1951) のもっとも重要な作品の一つである。このことを疑問視するロシア文学研究者は、プラトーフが二十世紀ロシア文学を代表する作家の一人であることを疑う研究者以上に稀であろう。今日では、テーマ、形式の両面で『土台穴』は『チェヴエンゲール』と双璧をなしており、そのため「プラトーフ的世界観」を探究するためにも「プラトーフ的文体」を分析するためにも、しばしば試金石として選ばれている。われわれの報告もそうした試みの一つである。

われわれの方法は修辞学を利用する。ただし分析の手がかりとして、翻訳と原文の対照から始めたい。「プラトーフは翻訳不可能だ」というプロツキーの言葉はあまりに有名だが<sup>①</sup>、実際のところはどうか。われわれの考えでは、翻訳との対照はプラトーフの文体の特徴を知るための貴重な手がかりとなる<sup>②</sup>。究極的にはプロツキーが正しいとしても、その前に研究者がなすべきことはいくらかもある。翻訳とは一つの解釈であり、異なる訳文は解釈の違いから生まれてくることをわれわれは見るだろう。では解釈の違いをもたらすものは何か。われわれが「くびき語法 (zeugma)」という文彩に注目するのは、この問いに答えるためである。

1.1. 「くびき語法 (zeugma)」は反語法や反復法と同じく、昔から知られている文彩である。修辞学の事典やハンドブック類を見ると、多くの文彩と同様、くびき語法の定義もまた研究者の長年の議論的であったことがわかる。しかし問題になっている現象そのものは明らかであり、誰もがすぐに分かるようなものである。

[1] He travelled with his wife and his umbrella.

[2] 私は産着と心遣いに包まれて育った。(『知恵の書』、7.4.)

[3] There thou, great Anna, whom three realms obey  
Dost sometimes council take, and sometimes tea  
そこで、偉大なアンナ、三つの王国を従える汝は  
ときに会議を、ときにお茶を“take”する。(ポーブ)

---

1 Бродский И.А. Предисловие к повести *Котлован* // Корниенко Н.В. и Шубина Е.Д. (ред.) Андрей Платонов: Мир творчества. М., 1994. С.54-56.

2 同様の試みとしては次のものがある。Alexei Tsvetkov, “The Language of A. Platonov.” Unpublished Ph.D. dissertation in Slavic Languages and Literatures (The University of Michigan, 1983), ch.1; Robert Hodel, “Углюссия — косноязычие, объективное повествование — сказ (К началу Чевенгура),” in Robert Hodel and Jan P. Locher, eds., *Sprache und Erzählung bei Andrej Platonov* (Bern: Peter Lang, 1998), pp.149-59.

[4] Мы —

голодные,

мы —

нищие,

*С Лениным в башке*

*И с наганом в руке.*

我々は飢えている、我々は貧しい、  
頭にはレーニン、手にはナガン銃。(マヤコフスキー)

われわれが扱いたいのはこうした表現技法である。一般的にくびき語法は次のように定義される。「統辞論的ないし意味論的要請から、お互いに異質な二つ（以上）の要素を結び合わせること」<sup>3)</sup>。ラウスベルクによれば、くびき語法とはG(w1/w2)と図式化できるような表現形態のことであり、「近代においてくびき語法というと、普通は（統辞論的ないし意味論的に）錯綜したくびき語法の意味である」<sup>4)</sup>。「何らの錯綜も見られない場合には、それをくびき語法の名で呼ばないのが普通である。このような括弧づけが語法分析者の注意を喚起することはなかったからである」<sup>5)</sup>。

これに対して「くびき語法 (zeugma)」と「兼用法 (syllepsis)」を区別する必要を説く修辞学者も少なくない。彼らによれば、前者は省略法の一つでしかなく、後者こそが統辞論的ないし意味論的な錯綜をともなう文彩であるという<sup>6)</sup>。しかしこの区別はそう確実であるとも、生産的なものとも思えない。アーサー・クインは「意味論的に錯綜したくびき語法」と「兼用法」の関係をうまくまとめている。「いくつかのハンドブックはくびき語法という用語をこのタイプの[統辞論的ないし意味論的に錯綜した]省略法に限定しようと望む。また別のハンドブックは、動詞の省略法一般を指すのにくびき語法という用語を用い、別の[統辞論的ないし意味論的に錯綜した]省略法を兼用法と呼ぶことを好む。この混乱が何世紀にわたって続いてきたのには次の理由がある。ほとんどの兼用法はくびき語法であり、また一方もとても印象的なくびき語法は兼用法なのだ」(強調原文)<sup>7)</sup>。このクインの説明によれば、「意味論的に錯綜したくびき語法」と「兼用法」という二つの術語は結局、同じ文体事象を指していることになる。ここではクインの意見に賛成した上で、「錯綜したくびき語法」というラウスベルクの術語を採用したい。彼が指摘するように、G(w1/w2)という表現形態が文彩として知覚されるのは、w1とw2のあいだに統辞論的、あるいは意味論的な錯綜が認められる場合である。そうだとすれば、「兼用法」と「錯綜したくびき語法」を区別することが必要だという修辞学者は、結局、新しい術語を作ったにすぎない。

ただし、ロシア語ではсиллепсисという術語の方がzeugmaよりよく使われるようである。

3 野内良三著『レトリック辞典』国書刊行会、1998年、100頁。

4 ハイน์リッヒ・ラウスベルク著、萬澤正美訳『文学修辞学 文学作品のレトリック分析』東京都立大学出版会、2001年、194頁。

5 同上、193頁。

6 Alex Preminger and T.V.F. Brogan, eds., *The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics* (New York: MJF Books, 1993, pp.1250, 1383).

7 Arthur Quinn, *Figures of Speech: 60 Ways to Turn a Phrase* (Davis: Hermagoras Press, 1993), p.31.

だが多くの場合、それらはまったくの同義語として扱われている<sup>8)</sup>。

くびき語法は伝統的な文彩である。そのため、しばしば定型的な表現や常套句、紋切型として機能する。上の例では[2]がはっきりそうである。旧約聖書外伝『知恵の書』からの引用だが（新共同訳）、定型性の度合いが強く、かならずしも読者の注意を引きつけるとは限らない。くびき語法の定型性についてはヴォルコフが指摘している。「修辭的文彩としての兼用法 [=「錯綜したくびき語法」] はかなり多く用いられてきたが、現代のことば、とくに何人かの作家の文体では広汎に用いられており、かならずしも文彩として受け取られていない<sup>9)</sup>。だがこれは、くびき語法に限らず、ほとんどの文彩と譬喩について言えることである。どんな文体事象でも、「定型性」と「新奇さ」という二つのベクトルがはたらく。同じ技法であっても、ある表現は定型性（程度によっては紋切型）を、別の表現は新奇さ（ときに誤用すれすれの）を志向する。伝統的な修辭学はこのベクトルの差を十分に分析できなかった。作家の文体論を試みる場合、彼らがある技法によって何をしているのか、定型性と新奇さのどちらのベクトルをより重視しているかに注意しなければならない。

1.2. プラトーフがくびき語法を多用することを、身をもって体験しているのは翻訳者たちであろう。『土台穴』を原書と翻訳で対照して読むとき、彼のくびき語法の特徴がはっきりと感じられる。翻訳が文体分析の手がかりになることについてリファテールはこう述べている、「[文体技法の分析者は]情報提供者として他の言語への実験的翻訳を試みることもできよう。「自由」訳をしたとすれば、まさにその箇所には何らかの文体技法が存在し、そのために逐語訳が不可能になっていることが示されるかもしれない<sup>10)</sup>。「偏差 (écart)」という修辭学の伝統的概念を用いて言うと、自由訳を余儀なくされた場合、その箇所には偏差が存在するかもしれない、ということである。ただしリファテールも留保をつけているように、言語の構造上の違い、翻訳者の個性や方針なども大きな要因となっていることは言うまでもない。

この意味でとくにわれわれに刺激的だったのは、ロバート・チャンドラーとジェフリー・スミスによる英訳「The Foundation Pit」である<sup>11)</sup>。というのも、彼らはプラトーフのくびき語法をいわば「開いて」訳す、つまり G(w1/w2) の表現形態を解体して訳す傾向にあるからである。そのおかげでかえって、原文におけるくびき語法の働きがよく分かる。もちろん、チャンドラー・スミス訳の文学的価値は別の規準によって計らなければならないが、彼らが他の翻訳者よりもくびき語法に意識的に取り組んでいることは事実であろう。以下の作業では、チャンドラー・スミス訳を中心としつつも、もう一種類の英訳、仏訳、チェコ語訳、日本語訳も用いる<sup>12)</sup>。

8) Николюкин А.Н. (ред.) Литературная энциклопедия терминов и понятий. М., 2001. С. 282, 975; Волков А.А., Курс русской риторики. М., 2001. С.319.

9) Волков. Курс русской риторики. С.319.

10) ミカエル・リファテール著、福井芳男他訳『文体論序説』朝日出版社、1978年、45頁。

11) Andrei Platonov, *The Foundation Pit* (tr. by Robert Chandler and Geoffrey Smith, London: The Harvill Press, 1996).

12) Andrei Platonov, *The Foundation Pit* (tr. by M.Ginsburg, Evanston: Northwestern University Press, 1994 [1974]); *La Fouille* (tr. by Jacqueline de Proyart, Métropole Lausanne: L'Age d'homme, 1974); "Stavební Jáma," tr. by A.Nováková, *Světová literatura*, 1988, 6, pp.37-108; 亀山郁夫訳『土台穴』国書刊行会、1997年。

1.2.1. 版の問題について。ほとんどのプラトーフ作品同様、『土台穴』にも版の問題が存在する。ここではくわしく論じられないが、現時点でもっとも重要な版は三つあると考えられる。(1) ロシア国内で初めて公表された『ノーヴィー・ミール』1987年、6号の掲載分。(2)1995年にナターリヤ・コルニエンコの校閲で出版された「シコーラ・プレス」版。(3) 2000年にペテルブルクのロシア文学研究所から出版された「プーシキンスキー・ドム」版<sup>(13)</sup>。この版にはプラトーフの草稿に残された加筆や削除を復原した資料も付いており、作品の創作プロセスをある程度まで知ることができる。

翻訳の原本であるが、ギンズブルク訳、独訳、仏訳は出版時期から見て(1)よりさらに以前、1969年にソ連国外で出された版を用いたものと考えられる<sup>(14)</sup>。チャンドラー／スミス訳の原本は(1)である<sup>(15)</sup>。チェコ語訳は(1)、邦訳は(2)を採用したことがそれぞれ訳者によって明言されている。以下の検討では、引用箇所については(1)、(2)、(3)のすべてを確認した上で、(3)のページ数のみ示すことにする。現時点では(3)がもっとも入手しやすく、またもっとも信頼できる版だからである。

1.2.1. 版による違いが文彩のレベルに影響することもある。

[5] В свои прогулки он [Прушевский] уходил далеко, в одиночестве. [(1), 81; (2), 215]

В свои прогулки он уходил далеко в пространство и одиночество. [(3), 59]

プーシキンスキー・ドム版ではくびき語法が現れているのに対して、コルニエンコ版とノーヴィー・ミール版はそうでない。「空間」と「孤独」を並列している第二の表現は文彩としての偏差を感じさせる。これに比べると第一のものはいわゆる「ゼロ・レベル」、すなわち文彩の偏差が存在しないと考えられる状態を示している<sup>(16)</sup>。つまり第一の表現は、第二のくびき語法を「開いて」言い直したものと考えられる。版もまた一つの解釈であることを示すケースだが、ここではくわしく論じることができない。われわれは校訂者でなく翻訳者たちの作業を検証していこう。

1.3. 直訳が容易なケースから見る。

[6] «[Прушевский] сидел *среди света и тишины*» (34).

«and sat there *in the light and silence*» (Ch, 29).

«he sat in *the brightness and silence*» (G, 27).

«puis resta assis *dans la lumière et le silence*» (31).

«a seděl tak *uprostřed světla a ticha*» (51).

13 Платонов А.П. Котлован // Новый мир. 1987, №6. С.50-123; Котлован // Взыскание погибших. М., 1995. С.170-281; Котлован. Текст, материалы творческой истории. СПб, 2000.

14 Платонов А.П. Котлован // Грани. Т.70. 1969. С.3-107.

15 ロバート・チャンドラー氏へのインタビューによる。

16 グループ μ 著、佐々木・樋口訳『一般修辞学』大修館出版、1981年、52-55頁。

「光と静寂のなかに腰をおろし」(34)。(17)

- [7] «и сколько годов он ни смотрел из деревни в даль и в будущее» (57).  
 «and no matter how many years he had looked out from his village *into the distance and into the future*» (Ch, 70).  
 «And in all the years that he had looked out of his village *into the distance and into the future*» (G, 62).  
 «Il avait eu beau, des années durant scruter de son village *l'horizon et l'avenir*» (67).  
 «a třebaže celá léta hleděl z vesnice *do dálky a do budoucna*» (68).  
 「そして遠い彼方を、遠い未来を村からどんなに長く見つめようともし」(91)。

この二例ではどの訳文も原文のくびき語法を生かしている。二種類の英訳のあいだに語句の違いがほとんど見られないことから、翻訳者たちは広い選択肢一言いかえれば、より大きな困難一に遭遇しなかったと考えられる。直訳が容易なのは、[6]と[7]、いずれの表現も定型性へのベクトルが強いためである。文彩が定型的であるほど直訳しやすいというのはわれわれが見いだした一般の傾向である。

定型性へのベクトルがきわめて強い場合、それは常套句、紋切型として機能する。プラトーフはそうなくびき語法も用いている。

- [8] «вы нашу линию портите, вы *против темпа и руководства*» (45).  
 «you're damaging our line, you're obviously *opposed to the work tempo and the leadership*» (Ch, 48).  
 «you're wrecking our line, you're *against tempos and leadership*» (G, 44).  
 «vous gâchez notre ligne, vous vous *opposez au rythme du travail, à nos dirigeants*» (48).  
 «že nam kazíte linii a že jste *proti tempu a vedení*» (59).  
 「あなたはわれわれの路線をだめにはしているのです。あなたはテンポと指導部に反対している」(61)。

この場合も直訳は容易である。コズロフの発言は明らかに紋切型として示されており、文彩としての新奇さは感じられない。しかし常套句的な文彩には独特な機能があることを忘れてはならない。リファテールが言うように、常套句は「ある種の社会的、もしくは道徳的態度と不可分であるため、作者が作中人物を位置づけるのに役立つ」(18)。したがってここでは直訳しやすいというだけでなく、直訳すべきである。『土台穴』では、サフローフ、コズロフ、活動家らの「公式的な」発言に出てくるくびき語法はこうした役割を担っている。その点では、くびき語法はプラトーフ独自のものでなく、当時のソ連の公式的文体と

17 以下、簡便を計るため、原文、翻訳とも『土台穴』からの引用は本文中でページ数のみ示す。英訳についてはチャンドラー／スミス訳はCh、ギンズブルグ訳はGと略記して区別する。引用文中の斜体はすべて引用者による。

18 リファテール『文体論序説』、165頁。

プラトーフのそれをつなぐ結節点の役割を果たしている。

1.4. 翻訳者がより広い選択肢を与えられているケースに移ろう。言いかえれば、くびき語法をそのまま訳すか、それとも自由訳を試みるかの選択を迫られるようなケースである。「原文のグロテスクな生硬さを優先させるべきか、あくまで読みやすさを考慮すべきか」<sup>(19)</sup>の選択には、翻訳者としての方針や個性、そして何より彼らの解釈が示されている。明確に「読みやすさ」の途を選択したのがチャンドラー／スミス訳である。彼らはくびき語法を「開いて」、つまり何らかの方法でG(w1/w2)の表現形態を解消して訳すことが多い。その方法を見ることによって、この文彩の特色を知ることができる。以下、五つのパターンに分けて見ていく。

1.4.1. G(w1/w2)のGを二つの言葉に訳し分ける方法、つまりG(w1/w2)→G1w1/G2w2とする変換は、簡明であるが、『土台穴』の翻訳ではあまり用いられていない。安易すぎて使う気になれないこともあろうが、そもそもこの方法で済むようなくびき語法は定型性へのベクトルが強く、わざわざくびきを「開いて」訳す必要がないのである。次の例では、ギンズブルグ訳だけがG(w1/w2)→G1w1/G2w2の変換を行っているが、それによって他の翻訳よりとくに分かりやすくなってはいない。この変換を行わなくとも、もともと分かりやすい表現だということだ。[9]は1.3.のグループに入れてもよいほどであろう。

[9] «Сафронов, делая интеллигентную походку и задумчивое лицо, приблизился к Чиклину» (46).

«Safronov then strolled up to Chiklin, adopting a thoughtful face and cultured stride» (Ch, 51).

«Safronov, walking like an intellectual and making a pensive face, approached Chiklin» (G, 46).

«Safronov prenant une démarche d'intellectuel et un air pensif, s'approcha de Tchikline» (50).

«Safronov, předstíraje inteligentní chůzi a zamyšlenou tvář, se blížil k Čiklinovi» (60).

「サフローノフが、知的な歩き方と物おもわしげな顔で、チークリンに近づいてきた」(64)。

1.4.2. はるかに興味深いのは、G(w1/w2)において片方の要素を独立した節や文に代えてしまう方法である。あえて図式化するなら、G(w1/w2)→G1w1/S+G2w2とでもなろうか (Sは主語を表す)。この方法はチャンドラー／スミス訳でしばしば見られる。[10]では節を、[11]では文を使っており、とくに後者は大胆な自由訳になっている。

[10] «он установил особое нежное равнодушие, согласованное со смертью и с чувством сиротства к остающимся людям» (36).

«he had now established a certain tender indifference that was reconciled to death and to his feeling that the people remaining alive after him would be orphaned» (Ch, 33).

«he had established a special delicate indifference, in accord with death and the orphaned state of the surviving people» (G, 31).

19 亀山訳『土台穴』、254頁。

«il y avait instauré une sorte de tendre indifférence faite de l'acceptation de la mort et du sentiment d'être un orphelin au milieu des hommes» (35).

«se rozhodl zachovávat zvláštní lehkou lhostejnost smířenou se smrtí a s pocitem osiřelosti vůči zůstávajícím lidem» (52).

「もしも自分が特別の優しい無関心—それは、死、そして残る人々への孤児の感覚とひとつに結びついていた—を築いた意識を乱されさえしなければ」(39)。

[11] «Теперь же воздух ветхости и прощальной памяти стоял над потухшей пекарней и постаревшими яблочными садами» (50).

«Now, however, there was an air of decrepitude hanging over the lifeless bakery and the aged apple orchards, and he felt he was seeing them for the last time» (Ch, 57).

«But now the air of decrepitude and farewell memories hung over the extinguished bakery and the aged apple orchards» (G, 52).

«Mais maintenant, une atmosphère de vétusté et d'ultime souvenir pesait sur le four éteint et les pommiers décrépits du verger» (56).

«A teď se nad vyháslou pekárnou a zestárlými jabloňovými sady vznášel dech stáří a loučení» (63).

「しかしいま、消えたパン屋や廃れたリンゴ園のうえには、老朽と別れの記憶の空気が漂っていた」(73)。

チャンドラー／スミスがこうした方法を選んだ一つの要因として、プラトーフ独特の生格表現が挙げられるだろう。「чувство сиротства к остающимся людям」や «воздух прощальной памяти» などの言い回しは、それ自体文彩として知覚されるような複雑な表現である<sup>(20)</sup>。[10]で誰が「孤児」になるかについて、チャンドラー／スミス訳と仏訳は逆の解釈をしている。名詞句があまりに圧縮されているため、二通りの解釈が可能なのだ。このようにくびき語法とともに、それ以外の文体事象が現れることが『土台穴』ではしばしばある。こうした技法の積み重ねをリファテールは「収斂 (convergence)」と呼んでいる。「偶然できあがったものが単に保存された場合も、初めから緻密に組み立てられた場合も、収斂はすべて言語使用におけるもっとも極端な自意識の例と言える。そしておそらくは、もっとも錯綜した文体技法でもある」<sup>(21)</sup>。『土台穴』について言えば、くびき語法と他の文体事象との「収斂」が認められるとき、翻訳者にとっての困難もより大きくなるのが普通である。逆に言えば、[7]、[8]、[9]の用例が比較的直訳しやすいのは、目立った収斂が起きていないからと考えられる。

20 プラトーフの独特な生格使用については次の論文がある。Михеев М. Родительный падеж - пролетарий от грамматики, или гегемон в языке Платонова // Нариньяни А.С. (ред.) Диалог-1999. Труды международного семинара по компьютерной лингвистике и ее приложениям в 2-х томах. Т.1. Теоретические проблемы. Таруса, 1999. С.196-204.

21 リファテール『文体論序説』、60頁。



1.4.3. G(w1/w2)のw1とw2のどちらかを別の言葉に替えて、より同種のペアを作る方法もある (w1/w2 → w1/w2')。これによって、原文での組合せの異質さが抑えられる。これもチャンドラー／スミス訳が頻用する方法である。

[12] «[старичок и прочие неясные элементы] вышли из задних клетей и разных укрытых препятствий жизни» (109).

«...emerging from the storerooms at the back and the various other places where they had been detained» (Ch, 151).

«...came out of the back pantries and various concealed obstacles to life» (G, 132).

«...sortirent des resserres et partirent au loin» (138).

«...vyšly zadními přístavky a přes různé skryté překážky» (103).

「裏手の物置や、いろんな隠蔽された生活の障害物からぞろぞろ出てきて」(213)。

[13] «но зато посредством устройства дома ее[жизнь] можно организовать впрок — для будущего недвижимого счастья и для детства» (34).

«they could still organize it to good effect by getting the home built — for the sake of the kids and the unshakeable happiness that was to come» (Ch, 30).

«but by the building of the house it could be organized for later on — for future immovable happiness, and for childhood» (G, 28).

«mais qu'au moins, grâce à la construction de cet immeuble, on l'organize utilement, qu'elle serve au bonheur permanent de l'avenir et à l'enfance» (32).

«zato až bude postaven dům, může být zorganizován k užítku příštích dětí a pro jejich trvalé štěstí» (51).

「かわりに住宅を建てることで、それを後々のために組織することができる。未来のゆるぎない幸福のために、幼年時代のために」(35)。

[12]のチャンドラー／スミス訳は «разные укрытые препятствия жизни» を「隠れ場所 («the various other places where they had been detained»)」という具体的な意味に取ることによって「物置」とのバランスを取っている。チェコ語訳も「生の」を省くことによってw2の抽象性を和らげている。フランス語訳ではたんに「遠くから」と訳し、さらに1.4.1の方法(二つの動詞を用いる)を組み合わせている。だがこの仏訳は単純化しすぎているように思う。ギンズブルク訳と邦訳は直訳に近く、原文のくびき語法の新奇さをそのまま伝えようとしている。

[13]のチャンドラー／スミス訳はдетствоをkidsという、より具体的な概念に置きかえている。チェコ語訳もдетствоを(直訳の dětstvíでなく) dětiとしている。ここでは「幼年時代」が「子どもたち」の換喩的表現であると考えられる。チャンドラー／スミス訳とチェコ語訳はそうした解釈に立っているようだ。つまりここでも「収斂」が認められる。

1.4.3.1. 『土台穴』にはдетствоをдетиの意味に用いている箇所が他にもある。«хотя и знал,

что там ликують одни бывшие участники империализма, не считая Насти и прочего детства» (94), «земля состоит не для зябнущего детства» (98). これらは明らかに「幼年時代」によって「子どもたち」を表す換喩的表現であろう。実際、この二か所ではすべての翻訳者が「子どもたち」と訳している。つまり、[13]のようなくびき語法との組み合わせより、単独で用いられた譬喩の方が理解しやすいということである。

1.4.4. G(w1/w2)の表現形態においてw1とw2を一つの名辞にまとめてしまう、すなわちw1/w2 → w3とする方法もある。これはチャンドラー／スミス訳に見られるように、かなり踏み込んだ自由訳になる。

[14] «Уже проснулись девушки и подростки, спавшие дотопле в избах» (104).

«The youngsters who until then had been asleep in the village huts had now woken up» (Ch, 142).

«The young girls and the adolescents, who had slept in the huts, were up now» (G, 125).

«Les jeunes filles et les adolescents qui avaient dormi jusqu'alors dans les izbas venaient de se réveiller» (130).

«Už se probudila i mládež, která dosud spala po chalupách» (99).

「農家で眠っていた娘や未成年者たちはすでに目を覚ましていた」(202)。

[15] «Стороною шли девушки и юношество в избу-читальню» (105).

«Off to one side the youngsters were making their way to the reading-hut» (Ch., 144).

«Nearby, young women and adolescents walked to the reading-room hut» (G., 126).

«Des jeunes filles et des jeunes gens passaient en direction de la salle de lecture» (132).

«Opodál šly dívky a mládenci do čítárny» (100).

「彼のかたわらを少女たちや少年たちが読書室の農家に歩いていくところだった」(203)。

«девушки и подростки» や «девушки и юношество» などの言い回しは類と種を混同しており、いわゆるカテゴリー・ミスティクである（юношествоはюношаと違い、男女両方を意味する）。ギンズブルグ訳は[14]でも[15]でも直訳を貫いているが、原文の論理的な奇妙さは残ったけれども、かならずしも成功した訳文とは言われまい。[15]の仏訳、チェコ語訳、邦訳はюношествоをюношаに置き換えて訳しており、すなわち1.4.3.の変換（w1/w2 → w1/w2'）を行っている。これに対して、チャンドラー／スミス訳は「youngsters」という一語にまとめている。[14]のチェコ語訳も同様である。くびき語法の表現形態はまったく消えてしまうが、意味の取りやすさという点では優っている。ただしこの方法は使える範囲が限られている。このカテゴリー・ミスティク的表現は興味深い現象であり、後であらためて論じたい。

1.4.5. 「錯綜したくびき語法」とは、要するに統辞論的ないし意味論的に「つながらないはずの」要素をつなげる文彩である。そこでG(w1/w2)のw1とw2のあいだに原文では言われていないコンテキストを（再）構成することで、分かりやすい訳文を作ることできる。

[16] «[Вощев] мог пожертвовать на труд все свое слабое тело, истомленное мыслью и бессмысленностью» (28).

«he was willing to sacrifice in labour all of his own feeble body, exhausted as it already was by trying to find sense amid so much senselessness» (Ch, 18).

«he was ready to offer up in labor his feeble body, wearied out by thought and lack of meaning» (G, 18).

«il était prêt à consacrer au travail, toute la faiblesse d'un corps épuisé par la réflexion et l'absurdité des choses» (22).

«toužil [...] vložil do práce celé své slabé tělo znavené myšlením a pošetilou touhou» (46).

「考えごとや無意味さに消耗しはてた自分のひよわな体をすべて労働に捧げることができたらう」(20)。

ここでもチャンドラー／スミス訳とチェコ語訳が工夫した自由訳を行っている。後者は *бессмысленность* を *pošetilá touha* (愚かな願望) と訳しており、これは 1.4.3. の変換 ( $w1/w2 \rightarrow w1/w2'$ ) である。一方チャンドラー／スミス訳は、原文では言われていない関係を「思考」と「無意味さ」のあいだに設定している（「かくも多き無意味さのうちに意味を求めて…」）。「思考」と「無意味さ」のあいだに成り立ちうる解釈の一つを選んで訳しているわけである。これによって、少なくとも分かりやすい訳文になっている。逆にいえば、 $w1$  と  $w2$  の意味論的つながりが明確な場合は、そのくびき語法は理解しやすい、定型性に傾いた用例である。たとえば 1.1. で挙げたポープやマヤコフスキーの例 ([3]、[4]) がそうである。「会議」と「紅茶」という取り合わせは一見、意味論的つながりを持たないが、「アンナ女王の日常生活」というコンテキスト（あるいは包含集合といってもよい）は明らかであり、二つの要素の結びつきは理解しやすい（だからこそユーモアも理解される）。同じようにマヤコフスキーの表現も分かりやすいものである。「レーニン」と「ナガン銃」の結びつきを保証するのは「十月革命」というコンテキストである。『土台穴』についても同様で、[6]、[7]、[8] が定型性へのベクトルを示すのは、 $w1$  と  $w2$  をともに包含する集合、状況的コンテキストが推測しやすいからである。[6] で「光」と「静寂」を結びつけるのは「明るい静かな場所」というコンテキストであろう。だからといってことさら「明るい静かな場所に腰をおろし」と訳すとすれば、その翻訳者は文彩の意義を理解していないと言わざるをえない。1.3. でも述べたように、定型的な文彩をわざわざゼロ・レベルの訳文にする必要はない。だが [16] のように、「思考」と「無意味さ」を結びつけ得るコンテキストが一通りでない場合、翻訳者がそのうちの一つのコンテキストを選んで訳するという方法も有効である。くり返しになるが、翻訳もまた一つの解釈に他ならないからだ。

1.5. ここまで翻訳との対比を手がかりに、『土台穴』におけるくびき語法の諸用例を見てきた。われわれは少なくとも三つのことを確認しえたように思う。まずプラトノフがこの文彩を意識的に用いていること。紙数の都合からわずかな例しか引用できなかったが、くびき語法は『土台穴』でかなり高い頻度で用いられており、作家が自覚していなかったというこ

とは考えられない。第二に、翻訳者たちが自由訳を選ぶときどのような工夫を行っているかを見た。まとめておくと、原文での賓辞を二つに分ける (1.4.1.)。一方の要素を節や文に変換する (1.4.2.)。w1/w2のどちらかを別の単語に代え、より同種的なペアにする (1.4.3.)。w1とw2を一つの単語にまとめてしまう (1.4.4.)。w1とw2の結びつきを説明するようなコンテキストを(再)構成する (1.4.5.)。この五つはいずれも、G(w1/w2)の表現形態を「開く」ものであり、どの部位に働きかけるかによって方法の差が現れる。最後に、これがもっとも重要と思われるが、くびき語法といっても、定型性に傾く表現と新奇性に傾く表現があり、『土台穴』ではその両方が見いだされることである。その結果、直訳であっても無理なく訳されるケース (1.3.) と、生硬な直訳か自由訳かの選択を迫られるケース (1.4.) とに分かれる。

定型的な文彩、新奇な文彩という区別はくびき語法に限らず、すべての文彩と譬喩について当てはまる。ある時代、ある読者集団において定型的と受け取られている修辞技法に変化を加えることによって、「歪んだ」、新奇な表現が生じる。グループ $\mu$ の術語を借りれば「第二段階の偏差」を新奇な表現は糧にする<sup>22)</sup>。定型的な表現と新奇な表現が同一作品内に併存するとき(そのことは珍しくない)、前者は後者を引き立たせるものとして機能するのが普通である。つまり、新奇な表現の方が読者の注意をより強く引きつける。なぜなら新奇さは定型性の上に積み増された文彩、「第二段階の偏差」として読者に知覚されるからである。『土台穴』のくびき語法について言えるのも、まさにこのことである。ほとんどの読者は新奇なくびき語法を「プラトーフ的」と受け止める。しかし実際は定型的な表現も使われている。

問題は、定型性と新奇という区別が流動的なものであることだ。ある時代に新奇であった表現が時を経て定型的・慣用的なものになることはよく知られている。いったん偏差が知覚されても、やがてそれは規範化される。また逆の現象、すなわち現代の読者にとって新奇な表現と感じられるものが執筆当時の規範からすればまったく慣用的な表現だったということもよくある(擬古法はこの現象を利用した技法である)。したがって『土台穴』のくびき語法のうち、どれだけの用例が新奇で、どれだけが定型的かを論じるのは、どの時代の規範に基づいて論ずるのかを明らかにしなければ意味のない作業であろう。そこで確認しておきたいのだが、本論では『土台穴』執筆当時、つまり1920年代末-30年代初頭のロシアの文学・言語規範を問題にしてきたのではなく、現代の規範に依ってきたのである。ここ二十年ほどのあいだに出版された翻訳を資料に用いたことからそれは明らかだろう<sup>23)</sup>。執筆当時の規範を基準にしなければ意味がないという、ありうべき反論にあらかじめ答えておくと、ある文彩の用法が今日の時点で(二十世紀後半から二十一世紀初めにかけて)新奇に響くか定型的に響くかを確認することは、文体論的にも文学史的にも意味のある作業である。一つ一つの時代が「同じ作品」に対してもそれぞれの解釈を持つからである。

22 グループ $\mu$ 『一般修辞学』、12頁。

23 それゆえ、ある文学作品について異なる時代の翻訳を対比するのは興味深い作業となろう。しかしプラトーフの作品では、それは今のところ不可能である。

2.1.ここまでプラトーフのくびき語法の実例を見てきた。だがこの文彩が実際にどのようなものであり、何をしているのかについては、まだ答えられていない。翻訳との対照を離れ、文彩のはたらきを別の角度から見る必要がある。

そこでG(w1/w2)におけるw1とw2の意味論的關係に注目しよう。意味論的に錯綜したくびき語法は「異質な要素」を結びつけるというとき、w1とw2はどのような意味で異質なのだろうか。このことを問うてみる必要がある。

ラウスベルクはくびき語法における意味論的異質性を次のように分類している。(1) 隠喩によって生じたのでない異質性：(a) 自分たち／相手方、(b) 危険なもの／危険でないもの、(c) 価値の高いもの／価値の低いもの、(d) 物質的なもの／権利的なもの、(e) 認識／行為、(2) 隠喩によって生じた異質性：(a) 地理的なもの／精神的なもの、(b) 身体的なもの／精神的なもの、(c) 範例／真の意味、(d) 権威を有する個人／具象化された規範、(e) 体の部分／道具、(f) 所作／言葉、(g) 社会現象／象徴<sup>(24)</sup>。

この分類には問題がある。ラウスベルクはなぜ「隠喩によって生じたのでない異質性／隠喩によって生じた異質性」という分類が最初に来るのかを説明していない。そしてその下位分類にいたっては原則らしきものがまったく認められない<sup>(25)</sup>。思うに、彼は「相似ないもの／相似たもの」を分類の主原則にしているのだろう<sup>(26)</sup>。「相似ないもの」—その多くは対照的なもの—は「隠喩によって生じたのでない異質性」にまとめられ、「相似たもの」は「隠喩によって生じた異質性」にまとめられている。つまり彼は、くびき語法に見いだされる意味論的異質性を「対照法」と「隠喩」によって説明しようとしている<sup>(27)</sup>。

2.2. しかし「対照法」と「隠喩」によってくびき語法の異質性のすべてが説明されるわけではないことは、『土台穴』からの例で示すことができる。それによってくびき語法の原理について異なった視点を持つことができるだろう。

[17] «он бы пошел сейчас в поле и поплясал с разными девушками и людьми под веточками» (43).

«Уже проснулись девушки и подростки, спавшие дотолы в избах» (104).

«Почти все девушки и все растущее поколение с утра уходило в избу-читальню» (104).

«Стороною шли девушки и юношество в избу-читальню» (105).<sup>(28)</sup>

「カテゴリー・ミステイク」的用例とその翻訳例は1.4.4.ですすでに見た。プラトーフの草稿資料を見ると、「Уже проснулись девушки и женщины」と書き、その後женщиныを

24 ラウスベルク『文学修辞学』、197-199頁。

25 彼は別の著書では五つに分類しているが、そこでも分類の原則を説明していない。(1) 超人的／人間的、(2) 戦争／平和、(3) 見えるもの／聞こえるもの、(4) 具体的なもの／抽象的なもの、(5) 自分／相手方。See: Heinrich Lausberg, *Handbook of Literary Rhetoric* (Leiden: Brill, 1998), pp.314-315.

26 *Ibid.*, p.804.

27 くびき語法におけるw1とw2の異質性を「対照法」と「隠喩」によって説明しようとする立場としては次のものもある。Justin O'Brien, "Proust's Use of Syllepsis," *PMLA*, 69:4 (1954), pp.741-752.

28 以下の引用では翻訳の対照はしない。

подросткиに改めたことが分かる<sup>(29)</sup>。作家がこの種の表現を自覚的に用いたことが明らかである。

英国の哲学者 G. ライルは『心の概念』において「カテゴリー・ミスイク」の概念を次のような例で説明した。師団の分列行進を見ている子供が、これが歩兵大隊、これが砲兵中隊、そしてあれは騎兵大隊、説明されたあとで、師団はいつ出てくるかと尋ねるならば、この子どもはカテゴリー・ミスイクを犯している。なぜなら、「その分列行進は、歩兵大隊、砲兵中隊、騎兵大隊、そして師団、というパレードではなく、師団の歩兵大隊、砲兵中隊、騎兵大隊のパレードなのである」<sup>(30)</sup>。これは明らかに、[17]の用例と同種類の混乱である。ツヴェトコフはプラトーフのこの種の表現を「偽りの目録」と呼んでいる<sup>(31)</sup>。

カテゴリー・ミスイクは類と種の取り違えに由来する。たしかに歩兵大隊、砲兵中隊、騎兵大隊の次に師団が出てくるのを待っている子どもは間違いを犯している。しかし「論理学者が非とするものこそがまさに、修辞学が関わるものなのである」とグループ  $\mu$  が述べているように<sup>(32)</sup>、類と種の混同は提喩の名で認められてきた技法である。[17]の用例では w1 と w2 が提喩的關係にあると見なすことができる。

提喩的關係を利用したくびき語法はプラトーフの独創ではない。たとえば «urbi et orbi (to the city and the world)» というローマ法王が用いる呼びかけ表現がそれである。「都市(ローマ)」は「世界」の下位概念であるにもかかわらず、並列される。普通、辞書では「全世界に」という訳語があてられるが<sup>(33)</sup>、これは 1.4.4. で指摘した w1/w2 → w3 の方法に他ならない。ちなみに、アメリカ大統領が最近の演説でよく用いる «America and the world」という表現も同じレトリックを使っている。だがこれらの例は[17]の表現よりはるかに理解しやすい、定型的な文彩である。「都市」と「世界」にはたしかに意味が重複しているが、「ローマと(それ以外の)世界に」という意味論的分節が明白である。一般に、意味論的な分節が明らかであればあるほど、定型性へのベクトルも強まると考えられる。表現の逐語的意味と含意の隔たりが明らかだからこそ、「たんなる」文彩として知覚される。それに対してプラトーフの場合、「娘と(それ以外の)人々」や「娘と(それ以外の)未成年」といった分節を動機づけるものが作中で与えられていない。興味深いことに、[17]の用例をロシア人読者に読んでもらおうと、「おかしい」「ありえない」「プラトーフ的だ」と反応するだけのグループの他に、何らかの合理的解釈を試みるグループが存在する。たとえば、подросткиや все растущее поколениеはここでは девушки より下の年代を指すのだろうか、ここでの люди は молодые люди、つまり «юноши, мужская молодежь»<sup>(34)</sup> を意味するのだろうか、などである。合理的な分節が行えれば、理解しやすくなると考えていることが窺われる。

29 Платонов А.П. Котлован. Текст, материалы творческой истории. СПб, 2000. С.294.

30 G. ライル著、坂本他訳『心の概念』みすず書房、1987年、13頁。強調は原文。

31 Alexei Tsvetkov, “The Language of A. Platonov,” pp.94, 107.

32 グループ  $\mu$  『一般修辞学』、259頁。

33 『リーダーズ英和辞典(第二版)』研究社、1999年、2709頁; Словарь латинских крылатых слов. М., 1997. С. 821.

34 Ушаков Д.Н. (ред.) Толковый словарь русского языка. Т.2. М., 1938. С.106. ただしこの表現は「会話的、廃用(разг. устар.)」と注記されている。

2.2.1 提喩は伝統的に「類が種によって／種が類によって」、「部分が全体によって／全体が部分によって」、「単数が複数によって／複数が単数によって」表現される譬喩として定義される（「製品が材料によって」表現されるケースが加えられることもある）<sup>(35)</sup>。そこで、「類と種」以外の提喩的關係も『土台穴』のくびき語法に見られないかどうか調べてみよう。

- [18] «все равно ему уже не так долго осталось терпеть до смерти и до ликвидации всего» (44).  
«луна высоко находилась над плетнями и над смиренной старческой деревней» (97).  
«[старичок и прочие неясные элементы] вышли из задних клеток и разных укрытых препятствий жизни» (109).

この中で比較的定型的で分かりやすいのは、97ページの例であろう。「垣根」と「村」のあいだには「部分と全体」という提喩的關係が見てとれる。それに対して44ページの「死」と「すべての破壊」では、両者のあいだに「部分と全体」の關係があるのか、それとも「原因と結果」の關係があるのか（その場合、w1とw2の關係は換喩的になる一後述）、一義的に決めがたい。くり返してきたように、w1とw2の關係が明白でないほどくびき語法は定型的ではなくなる、というのがわれわれの考えである。このことは109ページの例についても当てはまる。w1とw2のあいだに「類と種」の關係が成立しているかどうか、原文では分かりにくい。チャンドラー/スミスのように、片方をより具体的な概念（«the various other places where they had been detained»）に取り換えてw1とw2の提喩的關係を明確にすると、原文より理解しやすい訳文が得られる（[12]を参照）。翻訳者だけでなく、一般読者も、表現の新奇さをそのまま受け入れるか、それとも合理的な解釈が可能になるような工夫を施すかの選択を強いられるはずである。

2.2.2. このように『土台穴』のくびき語法において、w1とw2のあいだに提喩的關係が成立しているいくつかの用例を発見した。もちろんそれは提喩的關係であって、提喩そのものではない。一方が他方の代りをしていないのだから、譬喩とはいえない。しかし、この種のくびき語法が、提喩と似たことを提喩とは違うやり方でしていると仮定することができる。つまりくびき語法とは「全体と部分」の關係を扱う文彩でないかということである。[17]、[18]で見た用例は未分化な「全体と部分」の關係を表現する。混沌とした全体性の表象を与えることが、プラトーフのくびき語法の中心的な役割でないかと考えられる。

2.3. 文芸理論家のジェフリー・ハートマンは、「部分」を「全体」に関連づける方法はただ二つしかなく、それは換喩と提喩であると述べたことがあるとヘイドン・ホワイトが書いている<sup>(36)</sup>。たしかに換喩は提喩と並んで「全体と部分」の關係を描き出す譬喩として広く認められてきた。「何らかの物質的、因果的、概念的な關係に基づいてある言葉が他の言葉の代

35 ラウスベルク『文学修辞学』、115-119頁; *The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, p.1261; Quinn, *Figures of Speech*, pp.56-58; Волков. Курс русской риторики. С.307-309; Николюкин. (ред.) Литературная энциклопедия терминов и понятий. С.535.

36 Hayden White, *Tropics of Discourse* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1985), p.94.

りをする」<sup>(37)</sup>というのが換喩の一般的定義である。問題は「物質的、因果的、概念的な関係」とは何であるかだが、伝統的には次のものが挙げられている。「人間とモノ」(所有者と所有者、生産者と生産物、行為者と行為など)、「容器と中身」、「原因と結果」、「モノとそれが持つ性質」、「モノとそれが生ずる時空」<sup>(38)</sup>。もっと長いリストを示す研究者もいるが、さしあたりこれで十分である。

『土台穴』のくびき語法のなかでw1とw2が換喩的な関係にあると言っている例が存在するだろうか。われわれの考えでは次のものがそうである。

[19]

- (a) «Но вскоре он почувствовал сомнение в своей жизни и слабость тела без истины» (23).
- (b) «Слов в этой песне понять было нельзя, но все же в них слышалось жалобное счастье и напев бредущего человека» (97).
- (c) «Поэтому Жачеву пришлось появиться на представлении, среди тьмы и внимания к каким-то мучающимся на сцене элементам» (113).
- (d) «но зато посредством устройства дома ее[жизнь] можно организовать впрок — для будущего недвижимого счастья и для детства» (34).
- (e) «И с пиджаком в руке он стал посреди Оргдома — без дальнейшего прельщения к жизни, весь в крупных текущих слезах и в том сомнении души, что капитализм, пожалуй, может еще появиться» (108).

このうち(a)は、w1とw2が「原因と結果」の関係にあると考えられる。それが唯一可能な解釈ではないとしても、「自分の人生への疑い」と「真理を持たざる肉体の衰え」のあいだに因果関係を見てとることは可能である。(b)では「物悲しい幸せ」と「のろのろ歩む人間の節回し」のあいだに「モノとそれが持つ性質」の関係が見てとれる。さらに、(c)の「暗がり」と「何やら心痛める舞台の分子たち」は「モノとそれが生じる時空」によって関係づけられる。(d)では「人間とモノ」の関係が見てとれるだろう。というのも「未来のゆるぎない幸福」を享受するのは「子供たち」であるから。детствоがさらに детиの換喩と解され得ることは1.4.3.で指摘した。したがってここでは換喩的な関連が二重に存在する。(e)では「大粒の流れる涙」と「資本主義がふたたび現れるかもしれないという疑い」が「肉体と精神」の関係で結びついている。「肉体と精神」の結びつきは「容器と入れ物」の応用として伝統的に換喩的關係と認められてきた<sup>(39)</sup>。

グループ $\mu$ は隠喩と換喩の相補性について述べつつ、前者を「意味素の共有」および「部分の共有」の原理によって、後者を「ある意味素の集合への共同包括」および「物質的全体性への共同所属」によって規定する。すなわち、「隠喩の場合、仲介者となる辞項が内含されるものであるが、換喩の場合は内含するものとなる」<sup>(40)</sup>。この換喩の説明は、「何らかの物

37 *The Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, p.783.

38 *Ibid.*; Lausberg, *Handbook of Literary Rhetoric*, pp.256-260.

39 ラウスベルク『文学修辞学』、130頁。

40 グループ $\mu$ 『一般修辞学』、233頁。



質的、因果的、概念的な関係に基づいてある言葉が他の言葉の代りをする」という伝統的な定義とも適合する。換喩的關係を成立させる「物質的、因果的、概念的な関係」とは、グループ  $\mu$  のいう「包含集合 (l'ensemble englobant)」に他ならないからだ。ある換喩の理解は、その包含集合を把握することによって可能になる。王冠によって王位を、剣によって軍事を表すような定型的な換喩は何が包含集合であるかを考えるまでもないほど慣例化している。しかし包含集合が何か理解しにくいような換喩的關係もある。クインは『アモス書』4:6の「だから、わたしもお前たちのすべての町で歯を清く保たせ、どの居住地でもパンを欠乏させた」(新共同訳)を挙げ、この表現を理解するには「食べ物がないと歯を磨く必要もない」という因果関係に気がつく必要があると説明している<sup>(41)</sup>。引用の後半で「パンを欠乏させた」とより逐語的に言い換えているため、前半の換喩が理解できない読者はそう多くあるまい。しかし、もし後半の言い換えがなかったなら、「清い歯」と「飢饉」という換喩的關係はそう明白なものではなかったろう。

このように換喩もまた、くりかえし使われる常套句的な表現と一回的な使用の、新奇な表現とに分かれる。グループ  $\mu$  は、二十世紀文学において多くの紋切型の換喩が見捨てられてきたと指摘する一方で、換喩が秘める可能性も指摘している。「極端な場合、隠喩が共通部分なしという形を目指し得るとまったく同様に、換喩は無限を包含するような集合に訴えかけることが可能である。そうなるとこの二つの文彩は一致してしまい、それに関して内からの正当化も外からの正当化もいらない」。そのような換喩は「必要な包含集合を創り出す」<sup>(42)</sup>。

こうしたグループ  $\mu$  の指摘はプラトーフのくびき語法のはたらきを考える上で重要である。[19]に戻ると、「自分の人生への疑い」と「真理を持たざる肉体の衰え」のあいだの因果関係は慣例化されたものでも論理的に明白なものでもない。それは読者の側の解釈によって打ち立てられる関係である。翻訳者もしばしば同じことをしている例は1.4.5. で見た。G(w1/w2)のw1とw2のあいだに原文では言われていないコンテキストを(再)構成するという作業は、結局のところ、w1とw2の包含集合を「創り出す」ことに等しい。たとえば[19]の(c)の邦訳は「暗がりの中で何やら心痛める舞台の分子たちに視線が注がれるなか」であるが、これはw1とw2のあいだに、原文では言われていない—しかしそう解釈することが十分可能な—空間関係を設定している。それによって「暗がり」と「何やら心痛める舞台の分子たち」の関係は理解しやすくなる。

プラトーフのくびき語法を検討するかぎり、G(w1/w2)のw1とw2の関係は、対照法と隠喩より提喩と換喩を軸にして考えた方がよいことが分かる。くびき語法は共通の言葉(G)によって二つの言葉(w1、w2)を提喩的あるいは換喩的に結びつける文彩である、という定義にわれわれはたどり着くのである。もちろん、これがプラトーフ以外のすべての作家のくびき語法について言い得るかどうかは、他の作家を対称にした比較研究を待たなければならぬ。しかしともかく、一つの検証可能な仮説を示した。

41 Quinn, *Figures of Speech*, p.53.

42 グループ  $\mu$  『一般修辞学』、236頁。強調は原文。

3.1. 哲学の伝統的な問いである身心問題を「カテゴリー・ミステイク」という考え方で解消してしまおうとしたとき、ライルがくびき語法に着目したのはそれなりに正しかった。「身体的なもの」と「精神的なもの」の結合は、くびき語法が伝統的に得意とした作業であった<sup>(43)</sup>。『土台穴』でも事情は同じである（たとえば[19]、(e)）。ライルは精神と身体のあいだに「原因と結果」や「容器と内容物」という換喩的關係を設定する、この文彩のはたらきに気がついていただろう。ただし彼はこれが伝統的な文彩であることを知らず（あるいは無視して）、たんなる「不合理な連言」として身心問題そのものごと、捨て去ってしまおうとした<sup>(44)</sup>。それに対してプラトーフはくびき語法の可能性を駆使して、精神と身体の関係を含め、さまざまな種類の「全体と部分」の關係、未分化な全体性の表象を示唆的に表現しようとしたものと考えられる。

3.2. プラトーフの他の作品ではどうだろうか。私が調べた限りでは、プラトーフは他の作品でもくびき語法を多用している。しかし頻度や新奇さへのベクトルという点で『土台穴』は突出している。[15]のようなもっとも新奇な用例は他の作品ではほとんど見られない。

『土台穴』とほぼ同時期に執筆された短編『ためになる』（初出1931年）には次のような場面がある。プラトーフのくびき語法の原理を凶解するかのようなエピソードなので、引用したい。ある農村に「神」と称される老人がやって来る。彼には不思議な後光が射しているため、村の老婆たちは彼を「神」と崇めるが、技師のグリゴリーはその後光が「神」の服の下に隠された電池によるものだと見抜いている。

[20] «В громкоговорителе же ослаб аккумулятор, и про то знал Григорий, а у бога висела вокруг груди свежая батарея элементов. Григорий поставил бога вблизи громкоговорителя и прицепил его проводами к аппарату. Радио, получив усиленное питание, зазвучало четким басом, но зато свет вокруг головы бога потух.

— Верите ли вы теперь в радио? — спросил Григорий собрание во время перерыва для подготовки оркестра в Москве.

— Верим, — ответило собрание, — *Верим господу и в шумную машину.*<sup>(45)</sup>

「神様と喧しい機械を信じます」という村人たちの答えはくびき語法である（しかもラジオを「喧しい機械」と呼ぶのは提喩である。ここにも「収斂」の例が見られる）。「神」と呼ばれる老人とラジオを電線で文字どおり「つなげる」この場面は、くびき語法の原理をほとんど戯画的に凶解している。「神」と「喧しい機械」を包含するのは、農村の電化と反宗教プロパガンダというコンテキストである。あるいは換喩は隣接性を原理とするというヤコブソンの有名なテーゼを持ち出してもよいかもしれない<sup>(46)</sup>。

43 ラウスベルク『文学修辞学』、198頁。

44 次のライル批判を参照。Gareth B. Matthews, “Dualism and Solecism,” *The Philosophical Review* 80:1 (1971), pp.85-95.

45 Платонов А.П. Впрок // Повести и рассказы. 1928-1934 годы. М., 1988. С.252.

46 Roman Jakobson, “Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances,” in *On Language* (Cambridge: Harvard University Press, 1990), pp.115-133, esp., pp.129-133.

登場人物たちの換喩的な思考法は『土台穴』からも挙げることができる<sup>(47)</sup>。次の例ではくびき語法は用いられていないが、活動家の思考は典型的な提喩的進行を示している。

[21] «Особенно долго активист рассматривал подписи на бумагах: эти буквы выводила горячая рука революционера, а рука есть часть целого тела, живущего в довольстве славы на глазах преданных, убежденных масс. Даже слезы показывались на глазах активиста, когда он любовался четкостью ручных подписей и изображениями земных шаров на штемпелях» (68).

活動家の思考には「署名→革命家の手→革命家の身体→彼を見る献身的大衆」という提喩的連想が見てとれる。「プーシキンスキー・ドム」版の注釈は、「活動家」にとっては行政関連の印刷物や郵便スタンプさえ「上級機関のある種の継続であり、物質化したものである」<sup>(48)</sup>と説明している。言い換えれば、活動家はソヴィエト権力を提喩的に捉えているのである<sup>(49)</sup>。

もちろん、村人や活動家の思考を作家自身や作品全体の思想と同一視することはできない。これらの言葉はいくぶん客体化され、アイロニーの影を落された「他者の言葉」(パフチン)である。同じことは[5]から[19]までの用例についても、程度差はあれ言える。常套句的な文彩が、それを用いる登場人物の思想的、社会的立場を描くために用いられている例については1.3.で指摘した。だが新奇さを示す文彩の場合も同じである。登場人物の直接話法や自由間接話法のなかで用いられる場合、その文彩は「描くもの」と同時に「描かれるもの」として機能する。たとえば、少女ナースチャの死を知ったときのヴォーシェフの内省に反復されるくびき語法は、彼の思考内容を「描く」ための技法だろうか、それとも彼の思考スタイルを表すものとして「描かれる」対象だろうか。

[22] «Он уже не знал, где же теперь будет коммунизм на свете, если его нет сначала в детском чувстве и в убежденном впечатленье? Зачем ему теперь нужен смысл жизни и истина всемирного происхождения, если нет маленького, верного человека, в котором истина стала бы радостью и движеньем?» (114).

二つの文で三回、くびき語法が用いられており、意識的な反復であることは明らかだろう。この箇所はどの翻訳でもくびき語法を強調した訳文になっており、それは正しい選択である。反復によって強調されたくびき語法は、「形式—意味」の紐帯を解きえぬほど密にヴォーシェフの思考と結びついているからである。くびき語法が語り手の文体に属しているのか、ヴォーシェフ自身の言葉遣いに属しているのかを問うのはあまり意味がない。それは両者のスタイルにまたがっていると言うべきである。

47 プラトーフの描写において換喩が優勢であることについてはカラショフが指摘している。Карасев Л.В. Знаки покинутого детства // Движение по склону. О сочинениях А.Платонова. М., 2002. С.32-33.

48 Платонов А.П. Котлован. 2000. С.156.

49 この箇所ではプラトーフに特徴的な「小さなもの、部分的なものから全体的なものへの移行」がパロディ的に表現されている、とレーヴィンは述べている。Левин Ю.М. От синтаксиса к смыслу и далее... // Избранные труды. Поэтика. Семиотика. М., 1998. С.407.

全体性を示唆するという機能においては、紋切型のくびき語法であれ、新奇さに傾く表現であれ、原理的違いはない。「神様と喧しい機械を信じる」村人たち、書類の署名に社会主義の権力システムを見てとる活動家、「真理が喜びと動きになる」ことを夢見るヴォーシェフのあいだに原理的な差はない。違うのは素材である。部分から全体へ、未分化な全体性へと向かう動きにおいては、同一のパターンが示されている。くびき語法によって表現される、この全体性への動きはプラトーフの作品世界において「描かれるもの」(内容、テーマ)であると同時に「描くもの」、描写の構成原理にもなっている。

3.3. 議論の終りに、「他の作家におけるくびき語法」にも触れなければならないだろうか。だがそれを論じることは、本報告の枠を越えている。一般的なコメントで報告を締めくくることが許していただきたい。伝統的な修辞学の辞典やハンドブックを見れば分かるように、くびき語法は、聖書やホメロスに始まって今日まで生き続ける文彩の一つであり、プラトーフのくびき語法が特別なわけではない。しかし次の二点において、彼のくびき語法はヨーロッパ文学というコンテキストで注目に値するものだと考えたい。二十世紀のヨーロッパ文学では、プルーストと並んでこの文彩を多用した作家である点<sup>50</sup>。伝統的な理解とは異なり、くびき語法が提喩的關係と換喩的關係を軸にした文彩である可能性を示唆している点。今後、他の作家のくびき語法を調査する場合はこの二点をプラトーフとの対照項としうるだろう。

---

50 プルーストのくびき語法[兼用法]についてはオブライエンの論文を参照。O'Brien, "Proust's Use of Syllepsis."

## Силлепсис в «Котловане» А. Платонова

НОНАКА Сусуму

В настоящей статье мы беремся за анализ силлепсиса, одной из самых любимых фигур А. Платонова. Мы будем сравнивать подлинник Платонова с его переводами на разные языки. Этот метод способствует нашему пониманию особенностей стиля Платонова.

Силлепсис является «значимым нарушением синтаксической связи или смыслового соглашения в словосочетании или между предложениями» (Волков А.А. *Курс русской риторики*, М., 2001). Например: «и я, родившись,... вскормлен в пеленах и заботах» (Премудрость Соломона, 7.4.) или «Then thou, great Anna, whom three realms obey/ Dost sometimes council take, and sometimes tea» (Pope). Что касается Платонова, он, конечно, использует силлепсис весьма оригинальным способом.

С нашей точки зрения, большого внимания заслуживает английский перевод «Котлована», сделанный Р. Чандлером и Ж. Смитом. Дело в том, что они переводят выражения силлепсиса часто «с раскрытыми скобками». Их перевод делает виднее функцию силлепсиса в стиле Платонова. Мы рассмотрели выражения силлепсиса в «Котловане», сопоставляя подлинник с несколькими переводами. Нам удалось обнаружить следующие особенности силлепсиса в этой повести: во-первых, Платонов использует его сознательно. Частота его употребления в тексте, хотя мы не прибегаем к статистическим данным, исключает предположение, что автор не отдает себе отчета в эффективности этой фигуры. Во-вторых, мы сгруппировали приемы переводчиков, предпочитающих скорее дать понятный вольный перевод, нежели соблюдать буквальный эквивалент. Мы видим, что у них встречаются пять приемов: разделение соединяющего слова (G) на два (1.4.1.), превращение одной части в G (w1/w2) в предложение (1.4.2.), создание более однородной пары путем замены слова (w1 или w2) другим (1.4.3.), объединение двух слов (w1 и w2) в одно (1.4.4.), и наконец, (ре)конструкция смыслового контекста, объясняющего связь w1 и w2 (1.4.5.). Одним словом, все эти приемы имеют общей целью «раскрывать скобки» схемы G (w1/w2), каждая часть которой служит объектом вышеперечисленных приемов раскрытия скобок. А в-третьих, что самое важное, выражения силлепсиса, как и других фигур, имеют два направления: к шаблонности или новизне. И в «Котловане», в котором бросаются в глаза выражения силлепсиса, отличающиеся новизной, на самом деле имеются и те шаблонные, избитые выражения силлепсиса, которые позволяют дословный, но естественный перевод. Но дело в том, что, если мы встречаем в произведении примеры и того, и другого направления, то это не всегда означает, что они полностью уравновешивают друг друга. Наоборот, в большинстве случаев одно из них играет доминантную роль в характеристике фигуры в данном произведении. Что касается силлепсиса в «Котловане», можно с уверенностью сказать, что доминантным служит направление к новизне.

Сопоставление подлинника с переводами показывает уникальное употребление силлепсиса в «Котловане». Но еще не выяснены вот какие вопросы: какую роль играет силлепсис, или в чем состоит его функция, как фигуры. Мы считаем нужным обратить внимание на семантическую связь между w1 и w2 в схеме силлепсиса G (w1/w2). Если он объединяет неоднородные члены в общем семантическом подчинении, то в чем заключается семантическая неоднородность w1 и w2? Примеры силлепсиса в «Котловане» позволяют нам увидеть, что тут играют роль метонимические и синнекрхические связи.

В книге «Понятие ума» английский философ Г. Райль объясняет «ошибку категорий», которая происходит от отождествления рода и вида. Но с точки зрения риторики, отождествление или замена рода и вида является функцией синекдохи, одного из самых традиционных тропов. Мы рассмотрели, что платоновские силлепсисы, отличающиеся «ошибкой категорий», основаны на синекдохических связи между  $w_1$  и  $w_2$ . Но заметим, что к этому типу силлепсиса принадлежат не только платоновские, но и более шаблонные выражения (например, «Urbi et orbi», т.е., «Городу и миру», формула благословения папы всему католическому миру). Правда, выражение «Urbi et orbi» гораздо более понятно, чем платоновское выражение «девушки и подростки» или «девушки и юношество». И здесь мы видим пример противоборства между шаблонностью и новизной. В общем говоря, чем яснее семантическое членение между  $w_1$  и  $w_2$ , тем сильнее склонность выражения к штампованности. Силлепсис воспринимается как «простая» фигура, поскольку логически ясно и мотивировано расхождение или расстояние между буквальным значением выражения и намерением говорящего. А что касается платоновских выражений, мотивировок такого членения в повести не дается.

Что касается метонимии, она, как и синекдоха, традиционно рассматривается как троп, служащий для выражения отношений «части и целого». Ее определяют как «замещение одного слова другим на основании некоторого материального, причинного или концептуального отношения». Имеются ли выражения силлепсиса, в которых можно считать связь между  $w_1$  и  $w_2$  метонимической? По нашему мнению, в «Котловане» есть вот какие примеры: «Поэтому Жачеву пришлось появиться на представлении, среди тьмы и внимания к каким-то мучающимся на сцене элементам» или «но зато посредством устройства дома ее[жизнь] можно организовать впрок — для будущего неподвижного счастья и для детства» и др. Можно связать «тьму» с «вниманием к каким-то мучающимся на сцене элементам» через отношения «предмета и его места/ времени», типические метонимические отношения. А между «будущим неподвижным счастьем» и «детством» можно обнаружить отношения «человека и предмета», также типические метонимические отношения.

Таким образом, когда речь идет о силлепсисе у Платонова, было бы плодотворно исследовать его по аналогии с метонимией и синекдохой. Т.е., силлепсис является фигурой, которая с помощью общего слова или оборота речи (G) объединяет два слова или оборота речи ( $w_1$ ,  $w_2$ ) метонимически или синекдохически. Платонов, максимально используя силлепсис, стремится к выражению отношений «части и целого» различного рода, и далее к представлению нерасчлененного целого мира. Таково наше заключение.

Мы коснулись и других произведений Платонова. Как нам известно, он использует силлепсис и в других произведениях; но «Котлован» отличается частотой и новизной его употребления.

В заключение статьи мы скажем: силлепсис Платонова заслуживает внимания исследователей риторики и европейской литературы вот в каком отношении: (1) Наравне с Прустом, Платонов широко использует эту фигуру в европейской литературе первой половины XX века. Они, пожалуй, являются представительными мастерами силлепсиса данного времени. (2) В отличие от традиционного объяснения, силлепсис у Платонова позволяет нам выдвинуть гипотезу, что эта фигура основана на метонимических и синекдохических отношениях. Эти замечания смогут служить для сравнения с Платоновым других писателей, когда мы будем изучать употребление ими силлепсиса.